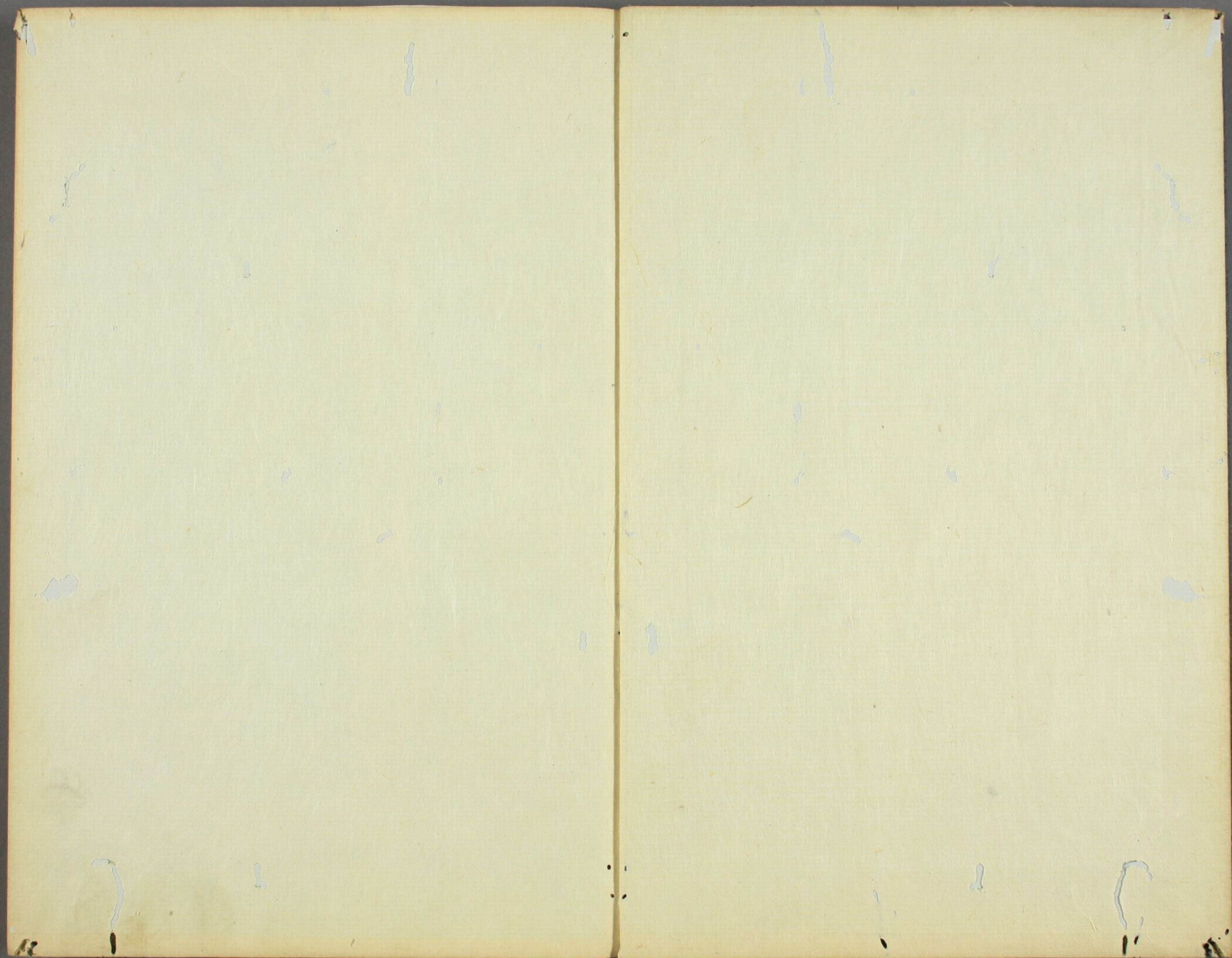


おのゝ玉の巻

田





詞瓊綸四之卷

や

○やの結びも紐後の中のり乃^{くま}は^{くま}辞^{くま}み^{くま}一の巻に生^{くま}る三樽^{くま}禮^{くま}哥^{くま}乃^{くま}
ぞのや何の^{くま}つ^{くま}は^{くま}結びの辞^{くま}日^{くま}と^{くま}中^{くま}也^{くま}何^{くま}を^{くま}粧^{くま}ひの辞^{くま}ある^{くま}あ^{くま}の^{くま}つ^{くま}
んと^{くま}ま^{くま}ぬ^{くま}る^{くま}あ^{くま}お^{くま}か^{くま}く^{くま}し^{くま}そ^{くま}ふ^{くま}あ^{くま}ど^{くま}ぬ^{くま}る^{くま}い^{くま}お^{くま}か^{くま}つ^{くま}が^{くま}

○あ^{くま}ぬ^{くま}ま^{くま}あ^{くま}く^{くま}結^{くま}ぶ^{くま}也^{くま}

一 多^{くま}ふ^{くま}風^{くま}千^{くま}と^{くま}く^{くま}る^{くま}う^{くま}り^{くま}は^{くま}む^{くま}た^{くま}ふ^{くま}う^{くま}ち^{くま}出^{くま}る^{くま}波^{くま}也^{くま}春^{くま}の^{くま}そ^{くま}川^{くま}花^{くま}

後拾
十四 け^{くま}と^{くま}あ^{くま}く^{くま}く^{くま}る^{くま}う^{くま}ち^{くま}あ^{くま}る^{くま}日^{くま}が^{くま}く^{くま}ら^{くま}ひ^{くま}也^{くま}あ^{くま}ど^{くま}結^{くま}る^{くま}根^{くま}か^{くま}く^{くま}は^{くま}多^{くま}を^{くま}

十四 てる^{くま}月^{くま}結^{くま}る^{くま}び^{くま}祓^{くま}の^{くま}床^{くま}也^{くま}志^{くま}め^{くま}と^{くま}ゆ^{くま}か^{くま}つ^{くま}く^{くま}さ^{くま}山^{くま}の^{くま}た^{くま}る^{くま}川^{くま}の^{くま}ぬ

新
九 こそ^{くま}也^{くま}ま^{くま}は^{くま}せ^{くま}れ^{くま}も^{くま}て^{くま}ふ^{くま}お^{くま}る^{くま}と^{くま}ま^{くま}く^{くま}た^{くま}つ^{くま}と^{くま}志^{くま}め^{くま}ぬ^{くま}天^{くま}乃^{くま}を^{くま}衣

一 こそ^{くま}也^{くま}ナ^{くま}の^{くま}や^{くま}ま^{くま}く^{くま}あ^{くま}く^{くま}ら^{くま}い^{くま}い^{くま}さ^{くま}が^{くま}く^{くま}あ^{くま}る^{くま}ま^{くま}ぢ^{くま}あ^{くま}ま^{くま}と^{くま}名^{くま}ふ^{くま}あ^{くま}せ^{くま}の^{くま}山

是^{くま}に^{くま}あ^{くま}る^{くま}の^{くま}下^{くま}
に^{くま}あ^{くま}る^{くま}と^{くま}露^{くま}
を^{くま}そ^{くま}く^{くま}す^{くま}ま^{くま}
あり

三の巻十の巻のつら^{くま}う^{くま}ぬ^{くま}む^{くま}の^{くま}け^{くま}註^{くま}小^{くま}あ^{くま}く^{くま}く^{くま}ら^{くま}い^{くま}い^{くま}さ^{くま}が^{くま}く^{くま}あ^{くま}る^{くま}ま^{くま}ぢ^{くま}あ^{くま}ま^{くま}と^{くま}名^{くま}ふ^{くま}あ^{くま}せ^{くま}の^{くま}山
る^{くま}あ^{くま}く^{くま}ら^{くま}い^{くま}又^{くま}
一 こそ^{くま}也^{くま}ナ^{くま}の^{くま}や^{くま}ま^{くま}く^{くま}あ^{くま}く^{くま}ら^{くま}い^{くま}い^{くま}さ^{くま}が^{くま}く^{くま}あ^{くま}る^{くま}ま^{くま}ぢ^{くま}あ^{くま}ま^{くま}と^{くま}名^{くま}ふ^{くま}あ^{くま}せ^{くま}の^{くま}山



口六 かしら〜を林のうらふや や 多つこの や 敷あへぬ枝を阿〜しふくこ

口七 みやこふせや や ちるちをうらの山 や 夕暮を〜し や 枯この下を

口八 うらきみれなく や によそふり や 一阿へぬ神を人のとよふと

口九 阿〜とれ〜 や つひふやこの秋の思ひもり や ぬ人乃とめうほ

此のやとあんとしやまふりけとるその言は秋を切せび〜のとりびて下へつととるにあつての枝と異こそその秋のしひうきをも此枝あり

○切るや や 後のとちえふおくやあり

口十 身あふも麻をな〜ぬをま〜おのがまを肌のおとち〜 や

口十一 敷あ〜ぬま〜山べ丸月と〜木葉が〜 や

口十二 とらやとたひひやふ〜ふ〜 や

口十三 うかりきるみのふの浦乃うらせ や

口十四 一〜に木は〜な〜 や

口十五 と〜〜おのをぬハ〜山ぶ〜 や

口十六 新便が〜み〜の姉〜 や

口十七 おりひ〜川 や みの〜山のむ〜 や

口十八 ちる花を何〜 や 一そのう〜 や

口十九 袖ふ〜月〜 や 一う川の山〜 や

口二十 其の枝〜 や 一君 や

口二十一 一〜 や 一

此のやとあんとしやまふりけとるその言は秋を切せび〜のとりびて下へつととるにあつての枝と異こそその秋のしひうきをも此枝あり

此のやとあんとしやまふりけとるその言は秋を切せび〜のとりびて下へつととるにあつての枝と異こそその秋のしひうきをも此枝あり

又

堀川
る青

みふぢ〜ふつろとけ成岩代乃ね **や** 多きうもほひおきまる
ふせハのをもとめりあつし

又

新
集

も川を此いの **や** あふの自向しそりそぐせ田のめを此白ゆか
ふせいのやあふのたをきぞと知るこあまをやがて下つてきうあつし

後
二十

おがつわしつ **や** りづこを ちうまのぬーあきあゆとえうぞうあし
みるせんかつ **や** りづくぞ ちをさうてあふま〜人よあふはつり

新
集

ゆきや〜ぬ〜 **や** あふぞ 秋のゆはをハち〜年〜は阿はと思ふを
あふ〜ハぞを〜

又

後
十一

なごら川あがれ 藤をた 阿らよのを〜はバウりのあ **や** なるあを

此歌を新集の二の巻愛格の歌り出せり老人と〜十一の歌り

刃ひらるるまかて
切〜

こせハ切るや少て別上の切やの條り出さる

○ **なごら** **あぞや**

新
十三

う絶がいはあるべがふあるま風れたたがゆく〜ととあ **や** みる〜ぬ
や つく〜ととあが〜た〜

後
十六

おいぬと〜 **や** ながをさせんをきん おいぬはりかハハ〜物う
大う〜 **や** 赤名のを〜

後
十七

翠の芳はふ **や** つひあね〜あづこのあうぬあをま引しとあ **や**
浅芽せうり〜おくおは〜くおつせあ〜人のあ **や** 意〜

八

あぞや や かく思ふをくく花ぞきさいうある花へり月ホハリづらん
此言ハあぞやを切手へ下へはかりてハてホを伴ふのまは

大つと何ぞ此下ハハカカと云ふ例あり右のどくなととあぞとの
二つのことやと云ふ例ありその中にあぞハカと云ふがかわくしてやと
更と云ふいと云く取ハなぞハヤと云ふ例のこ少カと云ふと云ふ

○あふあせやいふあせやあぞハ別ル下のまやの條ハ出せり

○やをこれこのや

まにあんや

左 花のあふあせと思ふに あふあせはあふあせのやと云ふ
右 花のあふあせと思ふに あふあせはあふあせのやと云ふ
左 秋乃向此下の人をこそいひあづる此光のまふにこそ や こそ や
右 秋乃向此下の人をこそいひあづる此光のまふにこそ や こそ や
左 秋乃向此下の人をこそいひあづる此光のまふにこそ や こそ や
右 秋乃向此下の人をこそいひあづる此光のまふにこそ や こそ や

まにあんや

後 八 ちみちをわけてはるもはるしすれぬさへ海へん人をさう や とさぬぬ
十 雑波ごとかりつむ草の何一つに此心とへも君をこそ や へどつる
左 又そのこ や 人なり や 山はく や むざとわけてあづるとせせん
右をみかきつをわけて や 此下ハハハ切手 や あり
一 〇 や あふあせはあふあせと思ふに や 花のあふあせと思ふに や
二 〇 や あふあせはあふあせと思ふに や 花のあふあせと思ふに や
三 〇 や あふあせはあふあせと思ふに や 花のあふあせと思ふに や
後 大 三 〇 や あふあせはあふあせと思ふに や 花のあふあせと思ふに や
十 〇 や あふあせはあふあせと思ふに や 花のあふあせと思ふに や

源氏物語
紅葉原
氏のあ
物思つ不立平山
金くもあふぬ
才のゆうちぬ
りしんちり
まや

新 八 後 芽つゝもろ形くおきーるあ

茶を 衣の玉 いふ人々おひひつけき **や** とま

三 つくふとそくべうりし **や** 秋

新 十 ちきり **や** ありぬらうれわ

右 十八 おひひき **や** におれりおき

十 ちきり **や** ちきりぬてしゆい

右 十八 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

新 十 春は秋乃るすのうち小せ **や** おひ

茶を 衣の玉 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

しせハとととちきりぬて
又とをよりおひるも **や**

新 十 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

十 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

又上ふととのおひるも **や**

新 十 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

又上ふととのおひるも **や**

後 十 ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

ちきりぬてハツタうとぞ **や** おひ

て **や** おひ

ひきりとあふ **や** おひ

此れは是より物なり日せきぬて

おきーつらつらりつらてんあせと

しとらへり満士の濃きぬてと

ちりとつらつらりつらてんあせと

や ちきりぬてハツタうとぞ

や ちきりぬてハツタうとぞ

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

ちきりぬてハツタうとぞ **や**

○やえ

おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ
おんやえ

五 春は旅乃やこい阿やあしうめ此を色了捲て祢香 **やえ** かくくし

六 吹風をなまそそうみようぐひたハ家 **やえ** 花尔もどふおせし

七 ありとせお啼えとせ冬よまきうぐれ秋のあせハ情く **やえ** 阿あ

八 阿あうらもなまそふにしをまのハせあめあすのこ **やえ** 意人と思ひし

九 舟とあふバうづと啼くく舟ハなんくもふどふ **やえ** 君もさしん

十 ぞしひあを阿 **やえ** ささうぐ。山川乃後さ流あよあど波ハあて

十一 阿しと阿を秋 **やえ** 人のあふべき。ある秋あもふらひしきよのを

十二 ぬるがうちおえるものこ **やえ** 夢といえん。そくぬるまをいふくもえん

十三 かくとくふえ **やえ** いかきれさしと学。阿しと志しあふあふおひを

十四 津の玉比まろ **やえ** 人を阿くと川。君もを流くも流くハえし

此のあはれのまろをのりまを **やえ** としとさふりひりあて

十五 いろせお吹風 **やえ** あびくこき。舟がさし。君も **やえ** 阿あ

右のあはれに中におく **やえ** こ。後び **やえ** たりし。

十六 ちる花のあくおしとあふ物なう江あうぐひたおとく **やえ**

十七 いその阿あ布ら此すをあふりみあハ意しと思を **やえ** ち

十八 阿あうらもなまそぬれを燈。小舟うらもせ人をもくろふおく **やえ**

十九 思ひもろん人をもぞとせおあをまう。まきく **やえ** 阿あ

二十 色といへむらぬをうあももたすれお **やえ** ちうら **やえ**

二十一 新 数あふばう **やえ** 阿あ。よの舟にいと阿あ **やえ** 志のま **やえ**

ちまふなるはふおくやまあり
切すやまハ

後拾

こころをぬ人の中ふはまきぬをまづ〜人乃中にもあ **やま**
ちまふやまハ **やま**を添ふるのこころ **やま**ハ **やま**のこころ
口をこあふたハより **やま**を **やま**に **やま**を **やま**に **やま**に **やま**に
と **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
のう〜う〜 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
を **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
万葉小ハ **やま**を **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
通り〜 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
少 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
阿 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に

○ **やま**

ち 天の川 **やま**を **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
口 久〜 **やま**の **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
口 夕〜 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
後 九 埜 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
ち 二 思 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
十 三 くら **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
万 十一 ち **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
六 拾 秋 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に
い せ 物 後 秋 **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に **やま**に

公 公あそりまう **めや** まゝん ちのぢのぢをまじりさる ちうま本のを

公後三 公条壇言全 されも何んぢ枝るわうまあうままいも **めや** まゝん ぢのぢのぢ

三内伝 日のがれせ **めや** ふくまむとまひーにれままぬまうまうれを

右のぢあまやハヤサ下のぢのぢのぢへうりて、あまうてあまばうーまうま
あまうや人ハをぢるぢまハあまうを人ハをぢるぢまうまままあまやぢるぢ
まままあまうをぢるぢまあまうまうまハまあまあまあまあまあまあま
ハまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
てまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
のぢまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
ハまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
ぢまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
くまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
ハまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

○右の外ハ形ハまこのぢあ、下の雑也の影けり出せり

○免也 免やそ 免やせ ら免也

あべり免ハ人のまうりうま 辞め免ハ人まのまこいづま也これ
ううへうりうま不用也

五 うえーう急ハ秋あま 時やけうまをん花をちめねまこ **めや**

十三 さうれまやおく初まね乃ハ後まうままハつくまもま **めや**

十二 秋あままハ山とまうまうま 鳴麻子これおま **めや** 福ぬまあま

十五 こ **めや** とはまあまのめうまあま けうまあまはまあまこれつ

一 数まあま花まをまてま **めや** おがづりあーとまあまうり

三 だまれ **めや** ああまをまに引むまびうまあままのあまのままの

十一 だ **めや** ああまハあまおひふるままあまあま **めや**

孫のあまあまあま
あまあまあまあま
あまあまあまあま
あまあまあまあま

人のまゝやうにいふこと
ぬれといふこと也

十二 及び一は大河の途に居る女のみみおのりていづかうい **めやえ**

後 十二 りぬそんりくせざう **めやえ** と思ふともいぬる人のさうありき

古 十二 山一形乃多野のきりだ小人乃多野乃多野 **めやえ**

後 十二 後 十二 あど彼乃多野のきりだ小人乃多野乃多野 **めやえ**

一 今つりにまゆ **めやえ** けりけりけりけりけり **めやえ**

めやえハ多葉ノいとむり **めやえ** とはさく **めやえ** ハ **めやえ** といふ事

古 十二 伊の志れあ少はの河一 **めやえ** 志れあ少はの河一 **めやえ**

後 十二 あり川乃山下とみみふくとせし **めやえ** 川乃山下とみみふくとせし **めやえ**

後 十二 あり **めやえ** あり **めやえ** あり **めやえ** あり **めやえ**

あり **めやえ** あり **めやえ** あり **めやえ** あり **めやえ**

○ **めやえ** ぶくさ

古 十二 秋の世におく **めやえ** 秋の世におく **めやえ**

古 十二 甲ハあせそ人を **めやえ** 甲ハあせそ人を **めやえ**

古 十二 くべそ **めやえ** くべそ **めやえ** くべそ **めやえ**

古 十二 いせの **めやえ** いせの **めやえ** いせの **めやえ**

古 十二 うれ **めやえ** うれ **めやえ** うれ **めやえ**

古 十二 しが **めやえ** しが **めやえ** しが **めやえ**

古 十二 ち **めやえ** ち **めやえ** ち **めやえ**

古 十二 嘆 **めやえ** 嘆 **めやえ** 嘆 **めやえ**

古 十二 ぬ **めやえ** ぬ **めやえ** ぬ **めやえ**

ぬれ **めやえ** のこと

後五

云々... 山のちりを ま 鳴るるあへ入日け

日八

天の川をばこりにとらふ ま ぼるふとさるまをみせ

日七

ま... ま 日け

日六

おづつうふ... ま しが言の

右十九
七十九
七

右の... ま ま ま ま

日十一

あふ... ま しの

日十

あふ... ま うさ

あまのこ

此格の... 七の巻... 切手...

日十三

風... ま ね...

後十二

う... ま 足...

日十五

云... ま 足...

日十六

あ... ま ...

後十一

み... ま ...

日十五

川... ま ...

日九

在... ま ...

日七

氣... ま ...

日十

鳥... ま ...

口 ちりくふじし神を侍えが一葉ふ まや りあうを彼もたぬ目ぞあそ

十七 然とそえりふ秋のうらべさみちか まや 思さへ若此衣さきりしを

新 十 あきば又ナツゆをさや万此宿ふ まや 元月月の末に去りしを

口 十五 やまゝぐるむらうにあそる 龍ふ まや りよ川糸の秋乃よの月

新 一 花あせや まや 糸のまきね 龍乃よの月 まや ちがまをばむと川朽木にあと

若下 六 花あせや まや 糸のまきね 龍乃よの月 まや ちがまをばむと川朽木にあと

六 花あせや まや 糸のまきね 龍乃よの月 まや ちがまをばむと川朽木にあと

右のまやハ皆まやと龍乃まきを言ふは切やまやとちがまハやの秋乃まやのまや
さる右の因ハまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと
名下一つまきね必やの秋乃まきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと
阿のまきねまきねかつべしまきねまきねにまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと
まきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと
まきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと
まきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねとまきねのまきねと

水の二

十七 ちがまをばむと川朽木にあと まや ちがまをばむと川朽木にあと

口 十八 阿せふりまあせれいくは宿ふ まや ちがまをばむと川朽木にあと

新 十六 妻くまは龍のまきね まや ちがまをばむと川朽木にあと

十 七 さきくまは龍のまきね まや ちがまをばむと川朽木にあと

新 九 ナツゆをさや万此宿ふ まや ちがまをばむと川朽木にあと

口 十五 やまゝぐるむらうにあそる 龍ふ まや ちがまをばむと川朽木にあと

新 十 花あせや まや 糸のまきね 龍乃よの月 まや ちがまをばむと川朽木にあと

後 十二 龍乃よの月 まや ちがまをばむと川朽木にあと

新 八 神せり まや ちがまをばむと川朽木にあと

水の二

十九
左

夫木
巻法

右ぐくせ木葉が下けうのきぬゝあせが やらん おとづせもせぬ

春のゆきけつぬごふふけてゆくまづのくゝあど やらん 物あせある

あづてやうんとつめちりやとて舞わてあみも文あせゆまにえくた今ゆを
の人こまことをたねつらわねむがらほさ左のあするあまのまなごの前もむ
ぎにまらぬと織せりまらぬ

もどぬふくまにままでの備くみあ粧ひ乃やあり

○ 歎息のや

なげきと。後世は。このうれひうら。むす。のこりあめむらど。
さくあしむれ。さくあしむれ。さくあしむれ。さくあしむれ。さくあしむれ。
この歎息の言あまか。今つりに歎息のや。このひくもをさあめり。

十一 ありがればさきへ入江乃まづ彼のまづ や 人をかくこひんとい

十九 思はどせありあせとのこりあせ や 思はどわきようひあし

十八 うち中はいつふ や いろぬのまぢまはるは今ハ物やつかし一死

十六 こととせむ や まらねなるもまらぬこととせむよえやいとむら

十五 祈ぬあはの祈ぬ若此い や まぬまをあふ大層のいき や ふう

十四 うきふ致むのいとむ や 袖のぬきせをさるれ

十三 さくぐく祈ふき物を向ふ や よハ乃一すう

十二 ありあせあるわがせは や 倭みどろつひハ神への命とおの

十一 人をなまうみわ や 都をたやととあもよとよとあもよと

十 吹ひが根を祢 や 山 や 吹風を人あ や ちらとつやらん

十九 や

あせありと
ひのせふあり
あせありと

十九
か

やらん
のこり
あせ
むら
まらぬ
よえ
いと
むら
ふう
まぬ
ま
大層
いき
ふう
やらん

浩の事にあれと
菫のやあれと
とちのやあれと
歎息のやあれと
まじり也

十四 おのが波り一甲ト未業ぞ志をぬゆる菱さく田子の恨めしのや

十五 ありわびぬ志の小篠にうまはくくもるふの

さきふあといまれとののこりてやと結べり但一のを二つとみ
とるがおかきこ

○もや はをハこのぬくらむこ

十六 君が志を履どのの志急乃ゆく〜とかくもるふこりて

十七 坂川と川云月さぬ〜せむきとぬ八十と比のきもつ

はるやたいと古き辞少くちる能日布靴し倭建太の甲羽か阿分まをやと見
そ外せさきうれおわし七のをち風龍り生せり又原氏物語あどの文小也
お月しそ世を者世と疾せる阿〜ぬ〜あり

○まや

十八 在中はうれもの

十九 阿ど人志志〜よハ月ふ

二十 あ〜後乃いそふ〜波ふ

二十一 面ゆきを小田れす〜をいとほあ

二十二 津の志志をふれ事ハゆぬな

二十三 有明をありひ世あ

二十四 わが志を結〜あう日せれうぢふ

二十五 秋乃旅を春日わあ〜ものな

さきふあといまれとののこりてやと結べり但一のを二つとみ
とるがおかきこ

阿りあきれ月さぬあ

阿らぬの果れ世をり〜何

後古十六
教馬名

まうとうぞうびりていおすたまたまらにとり人あ **まう** 又やまむらと

籍初五
後京極

まうのあまの **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと
目下は **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと

堀川
後百首

まうのあまの **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと
目下は **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと

まうのあまの **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと
目下は **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと

まうのあまの **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと
目下は **あま** 阿まの教馬のやまを原とるに **あま** 又やまむらと

○ぞや

三の巻ぞの教り出きり **十八の巻**

○かや

四の巻かの教り出せ **三十二の巻**

うさまの備くハみふ教息のやあ **うさ** 下北後びを **うさ**

● 雑のや

○一つはや

あがり **や** 依えの里 **大系** **や** ちる北山 **あがり** **や** 言問北山

あがり **や** 依えの里 **大系** **や** ちる北山 **あがり** **や** 言問北山

あがり **や** 依えの里 **大系** **や** ちる北山 **あがり** **や** 言問北山

これより下は
ありむらや也
あまのあまの
あまのあまの
あまのあまの
あまのあまの

その中にあはれ地をくわくふくつゝや言ふ所の山などかづゝまことくらふとふ
ほふはむがしと葛城の内ト何と云ふ山に〇拾遺十二かづゝまやあやハ久米の橋つ
くふ云ふにあはれと云ふ詞をいふ久米へくせりあづゝ

河原坂や

いせの海や

志がけうや

なるまにや

かくのこりひて下へ地ををきまはらふつ〇のことあり
まゝ

志がけや

おいてや

新波

神風

い勢

此もどひを上に枕詞を下へ地名を左風を右にまはらふやつゝあまふやつゝあ
まふあり世にふるあまふをにまはらふやまの母やあまふあまふまはらふ
とらまことふくまはらふはまはらふ

後拾遺
柿葉や

口ゆふまや

舟をさむらや

口天の戸や

口秋の葉や

まことあつるや

山陰や

松山や

後茶生や

はるぐいいとわや

〇のや

三の巻の、新や出ををハのひり

〇一つのや

左々

なると津ルまや

口十一はとまはらふや

三月は

口十

夕月旅まや

口十三あはを旅まはらふや

あうその

口九

此木の戸まはらふや

口五まがくまはらふや

雲取の

新勅
口十三

ゆかあまふまはらふや

はるぐいいとわや

新三

おのがはらふまはらふや

玉六
口十六

あまふまはらふまはらふのまはらふまはらふまはらふまはらふ

まはらふのやまはらふまはらふまはらふまはらふまはらふ

新二

花ちまはらふまはらふまはらふまはらふまはらふまはらふ

此やハのつらけこ
るやまはらふまはらふ
まはらふまはらふ
まはらふまはらふ
まはらふまはらふ

又せふ むや やふ むや りふ むや

かくのぶとくあきよふはあきも、併し下に居るかとようおくあといはトクツびまの
もぐひにそのあきの部よりくりにくいへり

右條の雑のやあき、しづまは切りあふ下の流びのハカツク

か

○まべてかちやう似る辞や、やと通りーソひてふ記あもあやーあふ若葉
ホハヤとりふべきまかといへる事あふーそれど又うあふ代やとりふへそ
ふとふかとりふべきあとなしうふふせとる地多し。みづりになつりひかきー
古五 たがたあめあれをみかきまのまほのゆふとまのあらん
古十 みずしけのふりの流りうくびあふ味を り 玉のまゆとるらん

やふ通ふか

新勅 万八 たむら 阿多り川ゆき、此是乃秋葉をりかぬるるりちり り 玉あん

口 ぬふささかを阿のの小秋りつろふはる人あふまき り ちらん

原氏 源氏 源氏 ありめしんしうちかどややよいふまごえぬ人乃き り あやまん

十一 おくゆ乃葉はえ志のきうらま乃まぬ り いらん 京の志はまに

十二 いせかりとさか此川邊を分ゆき り 文ぬる 子なきくこ

十三 かえりかく神那も何り氣 り 嘆らん 山本そのむ

十四 りづつにいふ年波はくえぬしんあの色 り おきー 末は查山

原氏 十五 まぼへくぞえさべうりらああれち り おとー 新あの色

又 太のあきの如き、霞のありをふまて、やふ通ひて流びゆやの橋の白く

後 八 物なりかとふさ月日各あぬよふ今春もりふふまをぬと り ちん

二五 やらんのさむか

秀五

川の清流ぬ糸糸しぬん山はくしそのかりをのちう紙し

口七

せを替むくととつらとりをくくおく山は物只ひりぞ入を切りまら

木の旁にのかを後ひいへの横り白下をそや小に通つてかす下をやんと譯して

やめらん

拾二

夕をばあか小かかとりをくくかどわかきやたえしにあそぬ志ふせ

後拾十一

あふふりありといふあふみくりくう人くましぬれはくま江の江

口九

みかさとりよふはつとせり今いふもむしむるの横ち〜ひありを

い〜のこもや〜のまあることハ小口トす。後ひをた〜ふれを

〇切るか

後のとちをたにおくかあり

口七

夕されむ人あそとこそうちそ〜ひあきりん〜めとあふるあ身り

口七

ふがうへり〜あぞおくある天の川と〜〜〜船乃ういのちつとり

口八

在中はむく〜くをやらすうつりきん〜が〜むとらのとめふあれるり

後十七

ふがたはふを死ふくう〜を〜福を人のふ〜阿うと〜ま〜はまり

口十七

ふれあゆふやとれら月ののど〜は〜は〜あ人乃初ぬよあれぞり

口七

秋の月山べさやうりて〜せ〜た川るぬ糸糸の敷を〜えり

口七

わさう田うあふるむつちれふに出ぬいよを今う〜に阿を〜うぬり

万葉集ハハらんクあんクあんといふ多〜その例を古今集よりとる〜ハ

と〜は後拾二ハハり寝みり〜かあるハ万葉集のあり

口二

春も秋ぬらハなとどりはく〜をち〜〜し〜ぬ人〜あられを

口二

秋乃能此若れももとりをぶ〜を回ふゆ〜ま〜く神と〜あ〜ん

吹〜上世風を〜秋萩のうつ〜を〜人のふの

後十

ふが袖を〜く〜う末にす川山り二〜より流のち〜ぬ日ハな〜

口八

脚つて能此志づ〜の〜ひ〜も阿〜はあれを〜を〜ぬりや〜こ〜あ〜

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

明ぬるり 川流の音れをきくもなきちかしく人の登りてのえぬるは

跪ぬるり 氣どふえをきくもなきちかしく人の登りてのえぬるは

又新古のころの句はすこしおかし
あむわしそねゆるあむのころ

まろくそねをり秋のあるまじくによろこぶり 春のよきざかりゆく

阿まどのや河原乃波のまじりせねくり 人の袖の秋ぞり

う川をゆくまろくそねのまじりあむり 春のよきざかりゆく

赤あがくり 物をとぶりに袖ふたぐりて是れま川風

又 此もあどは詞を下よりうちこしとてあむいりてねやう

ゆぬり とよしそねも舞をきくもあむせはあむうらうらあむ

此の切もあむを下へるとよしそねをいりて

新
十二

新
十二

新
十二

新
十二

月をあふまろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

まろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

あふまろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

かくせよあむ

まぶて語のとがめにあむる切やかのよをづく格の辞より更なる定まらん

又やの格ふつらぬく切やかのよの切や格の辞より更なる定まらん

とかとの格のりつらぬく切やかのよの切や格の辞より更なる定まらん

あふまろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

あふまろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

あふまろくり 暮るるをきくもあむの未れまじり人

きりかき
きりかき
きりかき
きりかき

後拾

三 まりむやあだのかつ山乃部公方一むりしむたふト

全八

八 何そげとせぬくしんそふハ思出ホよ麻ゆ急いのち

一

一 みりしむたふト急ま

三

三 五乃ぬれつと

六

六 浦ちかくぬくをほくは

七

七 玉ぼしはをまつ

右のまはるかしておせとをたとまてかへは

○かきまぬ格

五

五 三袋のぬれつと

八

八 よの中も

後

十六 何そせとせ

七

七 はのぬれぬれ

八

八 い

新

十七 何そせとせ

八

八 何そせとせ

又三つを

七

七 何そせとせ

七

七 何そせとせ

万

十二 うつふ

又四つを

万をよふのうらひよふのあひしつくとかといふ
これハきつくとくをさくろ格をいふ時ハ日
きつくとくをいふをさくろ格をいふ時ハ日
のせらるやのまのあひしつくとくといふ
あるやうやといひしつくとくといふ

古十三 君やうしぬやゆききりぬおとれいふ夢ううううゆてりあう

新勅十八 おりんこ夢うううううてあうりなすりおあきくわを

はあに二つ二つまあぬ

○かたのこのか

後拾八 ほのまうばあそでりへるにぬきつどを敵りかとう人乃はきくは

はかき語のあうをいれて下へつくかりりそのこと

此下にのみま切すかあり

古十七 おいぬとまをりぬ身をせぬききりぬおいぬはるかおそまうわ

拾十 うほよまはそむりむらぬそむきあんほ自せ阿りといれむへまや

後十六 かくくのいやまげきすものうちりやぶるめはぬやうぬきあ代と見ん

後拾十記 ながうらわをんのかうりやう下たくらぶうとぬうりつ

新十 らすをあばい去り物うと思ひるそをぬかふりぬ此世なうりぬ

玉記 ぬり 麻のきりてうぬれこをりてうのう月ぬぬみらるぬ乃山ぬぬ

○かた

古二 ちぬぬえぬぬきやうぐひぬとせり二度とどくべきとをる

四 ちきりきんうらあつてきたなをこれ年にくひ阿かあふ

後十八 みちのくぬきぬちの弱をぬかふハ何せこそまされあつく物

洞 くのまゆにあうこの色もあうらるる人のうらうのこ

十 じがぬらうとぬ志ばきにくぬまは信その森のちえをうの

千九 切あーさぬく川を思ひもあぐさぬと説もつひハとあうべき

古十一 人免ちるわはうを あやふ花びらそをぬどうゆふゆてをいぬも阿るん

語の字はおくか

まうか

まうか

二 去るる物あるのこ りを 山もさへあはしくしれをせむしつを

十 ちかかくてはくまみみるはうりれどせうれハ物 りを 意一さうりハ

十三 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを けみぐせのそり

十四 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 神れちがくみかくとむりハ

○かのまのわえ

十三 何ぶちまてる日ハ神れちうり りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十四 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十五 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十六 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十七 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十八 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十九 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

二十 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

二十一 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

○かまのまのわえ

一 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

二 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

三 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

四 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

五 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

六 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

七 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

八 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

九 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

十 ちちうりぬるとせきあけ時ちうりまいく りを 龍さ所 りを 小まぶあひくしん

二十の節は六十二
二十一の節は六十三
二十二の節は六十四
二十三の節は六十五
二十四の節は六十六
二十五の節は六十七
二十六の節は六十八
二十七の節は六十九
二十八の節は七十
二十九の節は七十一
三十の節は七十二

二十の節は六十二
二十一の節は六十三
二十二の節は六十四
二十三の節は六十五
二十四の節は六十六
二十五の節は六十七
二十六の節は六十八
二十七の節は六十九
二十八の節は七十
二十九の節は七十一
三十の節は七十二

三十五の節は七十二
三十六の節は七十三
三十七の節は七十四
三十八の節は七十五
三十九の節は七十六
四十の節は七十七
四十一の節は七十八
四十二の節は七十九
四十三の節は八十
四十四の節は八十一
四十五の節は八十二

右十七 ころもをうせくる道の志をくぬえすく此をしを玉律修 り也

右二十 吾を八度たきどりれきぬ柳を糸乃立作り也を此神のまゆ り也

はりて茶葉にいとおわりあぶてうの集ふいりあとしこといあてしてみありせとのこいへ修をこ集あどにおかりるせとて万葉集にあり

○ 免んか也

右二十三 山科此おとその山乃きりく人の志るづくこがたひ 免んか也

万叶 東 ちびあふ下ゆく見れうごま一たつくもの山をこひけ阿 免んか也

は外万葉十世の東より二つころ有又古序の文ふ今をこひざうめうせと有

○ かふ

右七 ちくく茶ちまかむくの世おしく此こんとしああるそまが り也

右十六 ちくく茶ちまかむくの世おしく此こんとしああるそまが り也

里語とタメニと
のほつつうり付
しあふもち

拾二 山びつにちる人そび神一海とてあまぬとらうぶつぎふくは り也

右二十 山びつにちる人そび神一海とてあまぬとらうぶつぎふくは り也

はうのかを後世にほめてよめども中留るこが舞うりかふは り也
るおわり七の巻を丸の巻なりあせり三十一の巻なり

○ かや

玉十 ころるべきとれ り也 さまがわをくくあわが原 り也 阿をぬよのそ

小大君 集 なのりせでちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也

○新千載十八忠孝 暖花のそらうる り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也
新拾を世賢と秋のいさをかつてゆまが花もみああり り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也
は二首有 り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也
香やあり り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也

拾七 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也

原氏 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也

拾七 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也 ちびあふ り也

きのまんとやうによまをさうりてべてわくは不小やとおくは皆がとこ又あか
 らぬとの何小は皆は誤り多しあかとしつべきをあかやとししいいある
 ゆゑなりとしつべきをいふあるゆゑなりとししいも皆なりとしつべきをいふあるゆゑなり
 とやうにりぬが皆がとこたへ人の文小は誤り何よりあかきを今の世小は文よ
 くかくと思ふ人をもさへは格を辨へ証をいふあかきべて何等の下小はやとい
 ふとおく皆かありとゆるべし
住持一妻有るいふを梅やあかき人さへいふ
 ぞわけてわく詞あり下のや妨あり積古今也たき
 とおくゆふ人のさうさうやあかき月のをさあかき人さへいふあかきといふはあかきの
 のひもと及び住持氏も米粒りまをぬくのどは比の事ありあかき人をいふ小たのぶやられ
 をいふわけて切せりや下妨ありさうのさあかき何れもさへいふはあかきいふはあかき
 あかきに事さへいふ能の衣いふわさの神師の浦の波やさういふはあかきいふはあかき
 但しあかきやあかきやいふはあかきやいふはあかきやいふはあかきやいふはあかき
 別ふ一つの格もさへいふはあかき
さやの格もさへいふはあかき
 おあかきてのさへいふはあかき
 又やいふはあかき
 あかきやいふはあかき

よきおく格もあつてもさの語ふいふを

世にさうりて
 あかきいふはあかき
 さうりてあかき

○ 痛りぬさうりて格も何

- 十一 後松 まぶらさうりてわくはあかき
- 一 いそねいふわくはあかき山をさあかき花は **い**へ乃あといふはあかき
- 二 ちまわいふはあかきなうれぬ大井川 **ソ**ぎき おさねのあかき志うみ
- 三 ちまわいふはあかき袖もあかき **た**が 夕暮と杉を秋の朝
- 十四 ちまわいふはあかき川さすむはあかき糸よりみ絶てあかき **あ**ど いはうい
- 十五 ちまわいふはあかき **あ**る **い**の あれをさあかきぬわあかきうれぬあかき **あ**どいふはあかき

全五 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日八 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日八 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

新 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日六 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日十 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日十 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日十 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日十 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

日十 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

九 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

○切す何 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

原氏 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

後 いろがうり神しうれとみうと山ニそそれを乃ちよれりー

古事記の玉のあはれをいふは

山一入のよきにおきて入んことを

のこころをこれくも新渡をいふ

いひつけたるいけ

○金葉三つあんのあふそのふと

波をやがてなかくと辞小しひく

諸のよちをたあ

い何とつとて何れりまき

梅の歌に世をよのむらあり

又下にわつをを信て切きりあり

○太の外ふつとつひて切きりあり

や何とよふやまにあふの巻やの巻ふせ

新撰後ひふり

○一つの推

他より下り付いたのむすひのついでにぬりの祠あるをいふに、若きとき新撰後ひふり

新撰後ひふり
あつれ恨のつれ
あつれむのあつ
えむの山風

ち 七 みちれくの志のふむぢを **たが** ゆゑにみぢを **たが** とおぼす

ち 八 ま川人を **たが** あつなつに都をありひのぬにあつばうの **たが**

ち 九 志のぶふれ **たが** ゆゑあつぬ物あれば今ハあふりはあつて **たが**

ち 一〇 **たが** 秋の阿つぬゆゑあつぬ物あれば今ハあふりはあつて **たが**

ち 一一 あひ志あつ **たが** 名をたつてを印つてあつぬ物と **たが** あつて

ち 一二 ちりひては程あつと小まき **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一三 あつては **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一四 みあごに **たが** ちりひて **たが** ゆゑあつぬ **たが** とあつて **たが**

ち 一五 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一六 里人 **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一七 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一八 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

○ ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 一九 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 二〇 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

ち 二一 ちりひて **たが** あつて **たが** とあつて **たが** とあつて **たが**

新言の時
オトゾニテ也
後ハハウニテ也
下ニハハウニテ也
あり

○ 祢がまきのうらみりて 後ハハウニテ也

十 さいりのこせめをくろし 後ハハウニテ也

日 いふりて 後ハハウニテ也

日 いふりて 後ハハウニテ也

後ハハウニテ也

○ いふあきや 此を也の部

右乃外

オトゾニテ也 オトゾニテ也

● いふ

○ あにかた 例

オトゾニテ也

○ いふ

十九 いふ

二十 いふ

例

例

● いふ

○ いふ

○ いふ

○ いふ

新言の時
オトゾニテ也
後ハハウニテ也
下ニハハウニテ也
あり

口十九

いぐせ

あなかしどり山より身をあしりおろしを猿小そりんとぞ思ふ

口十六

いぐせ

まきより阿久保いぐせみちへまきしんりかふ川乃実をたえぬ也

口十一

いぐせ

底といへむほど名小くそ思ふ也いぐせあ身を人小あしせん

口十三

いぐせ

あまをむくにいぐせかきえおんそいぐせ何をせぬるよめおんをめおせん

口十七

いぐせ

あな阿久保此部をふふとらんあまよりうけりあまといぬと

新勅七
公思

いぐせ

みふ人のいぐせとわりのふらうがふのたえしとあをいのうらあ哉

又かを添へいづせあり

口十一

いぐせ

うとおゆかうらああるともいおがめくそいぞうれりりり

又せを添へいづせあり

夫木
いせ

いぐせ

せといづらわほりかお井よりせ程ぞ添へまきれり

いづせ

口十五

いぐせ

あまのをなくさめて後の在まぐせ物をおもむ

たの外たにあつていづせ

いづせ

口十五いづせの時いづせあまのいづせ

口十五

いづせ

いづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせ

口十五

いづせ

いづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせいづせ

たの外たにあつていづせ

いづせ

○あつちうづうい切ち格あつちうづう例あつちう
ほつちうあつちうあつちうあつちう

方十七 玉ふせせ小がせや **づう** ころろの夜乃信日をおきふせふせ

後 ぬるちやに思ふ **づう** とまちとづうづうのせれを信といを信

いせ 物信 いふへのふせ **づう** ちくちくせらあつちうあつちうあつちうあつちう

方十八 よの中 **づう** 身の中あつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

新十五 いあづ万はて **づう** かのりふせしづう **づう** かのりふせしづう

狭ふ 老の免 **づう** と免の杜やられ人多のめあつちうあつちうあつちう

又下へを流して

方十九 わつづとせ **づう** 秋のせ **づう** 秋のせ

後 十 とら **づう** 家の物 **づう** 家の物

此巻三十五の... 何の部... 秋の色...

方十八 何の **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

太の... 秋の色...

角巻... 秋の色... 秋の色...

り **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

○い **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

方一 秋の色 **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

後 十九 **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

方 十九 **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

方 八 **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

方 八 **づう** 秋の色 **づう** 秋の色

いひて、くも多きと久しきとくゆるむるハむがみん、いくハ物ひの辞
あきば、いくも代あど、のこりひて、いくも代ぞとよ代の敷を問、
いくも代はといへを、此も久しきとよ代ハ、いくも代あへ、葉の
花とひひて、いくの辞あり、いくも世とあへといへを、
ては、まぢあをよくと記きて、
玉葉十代あり、
とのこりひて、多くの日敷のよとせ、
てせり、
○いくも
○いくも
○いくも

右以外ことなることあり

○いくも代あど、のこりひて、いくも代ぞとよ代の敷を問、
○いくも代はといへを、此も久しきとよ代ハ、いくも代あへ、葉の
○いくも世とあへといへを、

二の巻を要格、都小出せり

○ 新古のちりや

新結核大なる哥のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

拾遺 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古のちりや

十歌 新古のちりや

古々 新古のちりや

古々 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

右のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

新結核大なる哥のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

○ 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

拾遺 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

古々 新古のちりや

古々 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

右のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

新結核大なる哥のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

○ 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

拾遺 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

古々 新古のちりや

古々 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

右のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

新結核大なる哥のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

○ 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

拾遺 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

古々 新古のちりや

古々 新古のちりや

新古 新古のちりや

新古 新古のちりや

後拾 新古のちりや

新古 新古のちりや

右のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

新結核大なる哥のあめを今とて其の古く神樂の十哥を今とて其の古く

